

石材店の新しい可能性を探る

第四十二回

浄土真宗のお墓をどう考えるか？(前編)



プロフィール
内藤理恵子

博士(宗教思想)、種智院大学
密教資料研究所研究員。イラストレーター。『正しい答えのない世界を生きるための「死」の文学入門』(日本実業出版社)などの著書がある。

昨年の「お墓参りポスター」が物議を醸した

2020年7月、浄土真宗本願寺派のポスターがネット上で物議を醸しました。若い夫婦と小さな子どもが「南無阿彌陀仏」と彫られた和型のお墓の前で手を合わせている写真。そこに「父さん 母さん 来たよ」「よく来てくれたね」という「お墓との対話」を入れているポスターです。

阿彌陀様のはたらきがあり、極楽往生が確定している「わけですから、故人の魂の依代としての役割をお墓に見立てているわけではありません。その「ズレ」が、思わぬ形となつて表面化したといえるでしょう。

お坊さんたちのtwitterでの議論は白熱し、宗教紙のニュースにまでなりました。なお、このポスターについて宗派のホームページを検索すると、ポスターの意図について論理的に説明されています。(以下、浄土真宗本願寺派公式サイトより)

「違和感がある」とのことで、「このポスターはおかしい」という意見がそこかしこから噴出したのです。

お坊さんたちのtwitterでの議論は白熱し、宗教紙のニュースにまでなりました。なお、このポスターについて宗派のホームページを検索すると、ポスターの意図について論理的に説明されています。(以下、浄土真宗本願寺派公式サイトより)

私の場合、「一般からの目線ではこのポスターに何ら違和感がないこと」と「一部の浄土真宗の僧侶から意見が出る」との両者を理解できました。墓参りは日本人の馴染み深い民俗の領域で、おおよその場合は遺骨を通じて死者の魂をそこに立て「話しかけ」や「死者が往生することへの祈り」などが行われます。一方で、浄土真宗の教義は「生前に念仏をとこなしている時点で、そこに

微笑(ほほえ)まれ、亡き両親も、お浄土に往生され、み仏となられていきますから、私たちがお念仏申す身になることを、一番喜んでくださっているのです。



イラスト：内藤理恵子

(イラスト1) 山田昌史さん、山田信子さん(お二人の写真は次回掲載します)。今回は前編として、僧侶であり石材店を営む昌史さんのお話から。次回は、僧侶であり石材店のおかみさんであり、さらに終活カウンセラーでもある信子さんのお話をうかがいます。

う、ということのようです。しかし、現場の僧侶たちの中には「納得できない」という方も多いのです。

石材店で、なおかつ真宗大谷派の僧侶である山田夫妻に聞く!

そこで、この件についての見解を明快に示していただけたような人物を思い出しました。数年前、愛知県名古屋市内にある寛王山日泰寺にお参りに行った際、参道沿いの山田石材さんに立ち寄ったところ、石材店のご夫婦が、ともに真宗大谷派の僧侶資格を持つていらつしやると聞き、とても印象に残っていたのです。

資会社)ご夫妻に、お話をうかがいました(イラスト1)。

山田昌史さんは語る

真宗大谷派では、お墓を教義的に位置付けていないという印象が強いです。真宗僧侶と石材業を兼務されている「山田さんならではの」お墓観を教えてください。

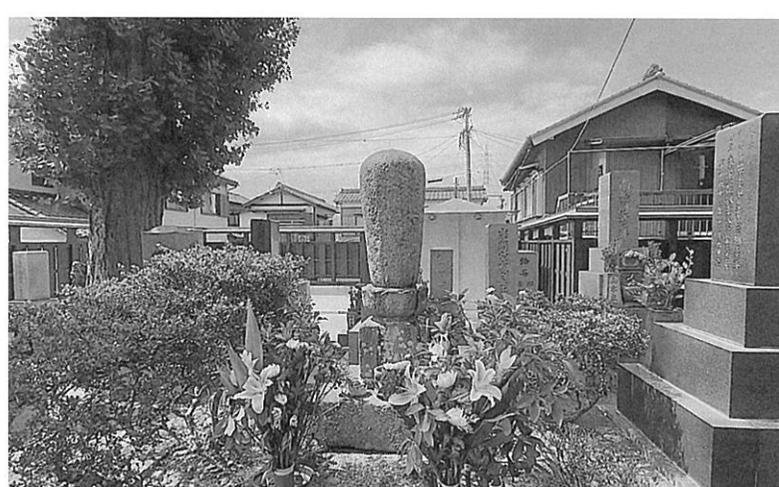
「お墓観を教えてください。そもそも本願寺は「親鸞上人(以下、親鸞)の鸞所」を由来としており、親鸞の石塔は比叡山の横川様式にて建墓されたといわれています。東西本願寺の歴代門主は「大谷家」といって、親鸞の血縁にて代々継承される「家制度」が採用されており、「大谷姓」は親鸞の埋葬地が由来となっております。

「お墓がないと往生(成仏)しない」とか言うものなら、それは教義的には間違いと言っていると思いますし、僧侶的な発言をさせてもらえれば救うのは阿彌陀如来であるため、こちらの用い方によってどうこうなる問題ではありません。そこに踏み込んでしまうと僧侶側は全力で反論してき

ます。しかし、実は真宗大谷派がお墓を否定したこともなく、西本願寺の大谷本廟には歴代門主のお墓が建立されています。いづつの間にか「お墓にこだわらない」のが拡大解釈され「お墓がいらない」という意見になつていくように見えますが、この二つは明確に区別する必要があると思います。



(写真1) 恵信尼自身が建てられたであろうと思われる五輪塔/山田昌史氏より写真提供



(写真2) 清沢満之先生(初代大谷大学学監)のお墓/山田昌史氏より写真提供

また、東本願寺の正式名称は「真宗本廟」とい「廟」の字が使われており、西本願寺の山号は「龍谷山」といい、こちらも墓所を由来としています(龍谷も旧字のオオタニを分けたもの)。

また、親鸞の妻である恵信尼は生前に自分の五輪塔を建てたいとの手紙

「お墓を否定するお寺様がよく言われる「某親鸞閉眼せば賀茂河にいられて魚にあとうべし」(改邪鈔)という言葉も、葬儀の如何によって往生は左右されることが本旨となつていられるといわれていますし、改邪鈔を書いた覚如が編纂させた御絵伝には「大谷の墳墓を」としっかりと描かれていますし、実際に流されていながら、お墓を建てたい真宗門徒には全力で応えてほしいです。(次回へ続く)

そして教学の面から考えても、正確に言えば、お墓に対して教義的な位置づけがないというのは正しいですし、お墓に関する作法が定まっていななどの問題もあります。が、実際に親鸞上人のお墓を建てられたのは残された方たちの想いがあつてこそです。真宗大谷派の近代教学の祖といわれる清沢満之先生(初代大谷大学学監)のお墓(愛知県碧南市)に、弟子である暁鳥敏先生(大谷派宗務総長)が亡くなるまで石川県から毎年墓参りされていたという話がとても好きです(写真2)。